序

学習院大学文学部教授
高埜　利彦

本書は、近世朝廷に関わる人名・役職について、年毎の公家の名鑑である「雲上明鑑」や「雲上明覧」などいわゆる「公家鑑」に記載される情報を1667（寛文７）年から1868（明治元）年までの期間のうち42年分をとりまとめたものである。抽出した情報は以下の３項目である。

①人物に関する情報

天皇・上皇・女院・女御・准后・東宮・皇子・皇女
……名前・年齢・父・母

五摂家……当主の名前・年齢・官位・家領高・居所・嗣子の名前・年齢・官位・諸大夫等

四親王家……当主の名前・年齢・品位・官職・家領高・嗣子の名前・年齢・諸大夫等

宮門跡……門主の名前・年齢・品位・寺領高・居所・里坊・附弟の名前・年齢

摂家門跡……門主の名前・年齢・僧位・僧官・寺領高・居所・里坊・附弟の名前・年齢

六位蔵人・両局
……名前・官位・年齢・居所

准門跡……門主の名前・年齢・僧位・僧官・寺領高・居所・里坊・附弟の名前・年齢

比丘尼門跡……門主の名前・年齢・寺領・父・母

②機構・組織に関係する情報

禁裏……武家伝奏と雑掌・禁裏付・取次・勘使・賄頭・御膳番・修理職・吟味方・賄方・板元方・鍵番・奏者番・上北面・下北面・女中などの名前、役料

院御所……仙洞付・院伝奏・院執権・評定衆・院参衆・取次・勘使・勘定頭・御膳番・修理職・吟味方・賄方・板元方・鍵番・奏者番・上北面・院蔵人・下北面などの名前、役料

東宮……東宮傅・東宮太夫・肝煎・三卿・伺候・陣頭・侍者・啓内舎人・帯刀・内膳監・主殿署・主馬署の名前

宮門跡・摂家門跡・准門跡
……院家の名前・出自・僧位・僧官・寺領、坊官・侍法師・承仕の僧位等、諸大夫・侍の名前・官職

比丘尼御所……比丘尼院家の石高・住所・御抱院家・家老

③その他

神宮伝奏・寺社伝奏・学習所（院）・門流

以上の情報は、もとより「公家鑑」記載のすべての人名・役職の情報を記すものではなく、よって近世朝廷人名要覧の書名を用いた。

戦前の日本歴史研究は皇国史観の影響のもとで、近世の天皇・朝廷に関する研究をある程度進めていた。三上参次『尊皇論発達史』（冨山房、1941年）はその成果である。また、皇国史観全盛時以前にも徳富猪一郎『近世日本国民史』（民友社、1927年）があり、宝暦事件や尊号事件などについても公家の日記史料などを駆使しての研究成果を生み出していた。

1945（昭和20）年の敗戦後、日本近世史研究に限るならば、社会経済史研究が熱心に取組まれ出した。戦前、明治維新の性格をどのように位置づけたらよいのか、日本の資本主義はどの程度に発達したものであったのか、などの課題に科学的に取組んだ研究は、時には弾圧を受け、不自由な研究環境に置かれていた。だから、敗戦後は自由に近世の村落構造や地主制研究に、活発に取組もうとした。そもそも地主制は、その当時の文字通り現代的課題でもあった。

そのような戦後の日本近世史研究の状況にもう一つ付け加えるなら、戦争は「もうこりごりだ」と大部分の人びとが反省をした時、戦争を進めた体制である軍隊や天皇制や神社についても、「もうこりごりだ」とばかりに研究対象から遠ざけたいきさつがある。いずれにしても、日本近世史では近世の天皇や朝廷を研究対象にすることはほんとんどなかった。

1970（昭和45）年代に入ると、近代・現代の問題として天皇制に研究関心が向けられた。そうした時、幕末・明治維新期に突然浮上して現れるように見えた天皇の、近世における実態が学問的にほとんど解明されていないことが問題となった。近世の国家論を解明するという枠組みの中で、天皇・朝廷の存在や役割を研究することが必要とされ出した。

1975（昭和50）年頃から、公家の日記を素材とし、史料分析して近世の朝廷の位置や役割を解明する研究成果がやっと生まれ出した。すでに戦後30年が経過していた。そこから四半世紀の間、近世の天皇・朝廷に関する研究は進められてきた。近世の朝幕関係論、朝儀再興論、公家の家職論、門跡論、武家伝奏・議奏の解明、家礼論、地下官人論などである。

これら近世の天皇・朝廷に関する研究成果の素材となった史料の所蔵機関は圧倒的に東京の機関、すなわち宮内庁書陵部や東京大学史料編纂所であった。それらの史料を利用できる研究者に成果が限定されてきたといっても言い過ぎではないであろう。この問題を克服し、一人でも多くの全国（外国も含め）の研究者に近世の朝廷研究に取組んでもらうには、活字史料集の出版は不可欠となる。東京大学史料編纂所の『大日本近世史料　広橋兼胤公武御用日記』や民間による『史料纂集』などの刊行によって、近世の公家史料集が利用できるようになったことは喜ばしいことである。今後さらに史料集の刊行は増加するであろう。

しかし、活字史料集出版が今後いかに増加しようとも、関係史料全体から見ればそれはごく一部に止まらざるを得ない。だがこの問題もやがては解消される日が訪れるであろう。インターネットを通して、

所蔵機関から、例えば公家の日記史料の写真版をデジタル画像として情報提供受けることが始まりつつあるからである。

では、誰もが史料閲覧が可能になることによって近世の天皇・朝廷研究は深化するであろうか。実はもう一つ条件が必要になってくる。それは、近世の公家の日記を読み進めるための各種の情報・知識を持ち合わせていなければ、史料解釈は容易ではない、ということである。公家の日記に登場する人名を調べるにはどうしたらよいのか、地名は、系図は、などなど既存の道具（出版物）をどう利用したらよいのかも含めて、研究の入門書とでも呼べる参考書が必要になってくる。研究に役立つ参考書が欠けていては、研究の広がりは期待できない。

1983年に始まった朝幕研究会では摂家であり関白右大臣となった一条兼輝の日記「兼輝公記」の1679（延宝7）年1年分を輪読することを中心にした研究会を20数年間続けた。1年分の日記を読み了える頃、折しも2001（平成13）年からの学習院大学人文科学研究所の共同プロジェクトに高埜を代表者として「近世の天皇・朝廷に関する基礎研究」のテーマで応募し、3年間の共同研究が認められた。研究会の1回目は2001年4月26日に行なわれ「兼輝公記」の1679（延宝7）年12月28日条から歳末までを読了した。そこでプロジェクト研究として新たに、近世の天皇・朝廷に関する最先端のオリジナリティの高い研究報告会を持つ他に、参考書となる研究入門書（「近世の天皇・朝廷研究入門」仮称）の編纂を進めることを目標に掲げた。研究入門書の構成案を検討する中で、当面諸機関に架蔵される「公家鑑」を写真によって収集する計画が立てられ、その中から人名要覧を作成することが企画された。以後、本書刊行に向けた研究会と作業が4年間続けられた。

2001（平成13）年4月に発足した学習院大学人文科学研究所では、その規程第3条第1項で「人文科学の分野における研究・調査及びその成果の刊行」を行なうべき事業としており、共同研究プロジェクトの成果を冊子の形で出版することとしている。人文科学研究所は、継続的に成果が出版される見通しから、これを「学習院大学人文科学研究所　人文叢書」と名付けることとした。

かくして本書『近世朝廷人名要覧』は「人文叢書　1」を冠してここに刊行されることになった。本書編纂に携った関係各位に感謝を申し上げる。とくに朝幕研究会のメンバーは今後の近世朝幕研究の進展のためには、誰もが使える基礎情報の共有化が必要であるとの思いの念の深さから、果てしないと思われた困難な作業を克服してくれた。心よりの感謝の念と敬意を表したい。